鳥　　類

山形県立博物館
奥　山　武　夫
日本野鳥の会
真　木　広　造

1.　最上川村山地区河川敷の鳥類（概要）…… 27

2.　最上川中流における鳥類の生息地…… 28

3.　最上川中流の特記すべき鳥類…… 34

4.　最上川村山地区河川敷の鳥類目録…… 49

1　最上川村山地区河川敷の鳥類

山あいから山形盆地に流出した最上川は中山町長崎地区に入って北進し，奥羽山系を源流とする各河川，須川，倉津川，押切川，乱川，野川など，又左岸にあっては月山，朝日山塊の水を集める寒河江川と多くの支川と次々と合流するところである。これら各河川の扇状地の末端部にもなっているため，この地区は山形盆地でも最も標高の低い，低湿地地形を形成しており，古来より水鳥類の多くが生息してきたものと推察される。

現在もそのなごりがいたるところで見られ内陸部はもちろん最上川全域でも，他では見られない水鳥類が繁殖し，渡りの時期の休息地，冬鳥類の越冬地になっている。

県内で初確認された水鳥類のコウノトリ，ナベヅルなどはこの流域である。サギ類は全国的に減少している種類であるが，ササゴイ，ゴイナギ，オオヨシゴイ，ヨシゴイなどがこの地区で繁殖しており，一時期姿を見せる種類としてアオサギ，ダイサギ，チュウサギ，コサギ，アマサギなどが確認されている。

ガン・カモ類ではカルガモが繁殖し，コガモ，マガモ，オナガガモが群をつくって集まり，ヒドリガモ，ヨシガモ，ハシビロガモ，キンクロハジロ，ホオジロガモ，ホシハジロ，ミコアイサ，オシドリなど一般に陸ガモ，海ガモと分けられている両種とも多くの種類が見られ，数は少ないがオオハクチョウ，コハクチョウも最近毎年のように渡来して越冬している。

シギ，チドリ類も多く確認されておりこの地区で繁殖するものとしてはコチドリ，イカルチドリ，イソシギ，コアジサシなどがおり，ケリ，タゲリ，ハマシギ，ツルシギ，キアシシギ，タシギ，ユリカモメなども姿を見せる。

県内でも近年非常に減少しているクイナの仲間であるヒクイナ，バンが繁殖している。現在平野部では，ほとんど見ることができなくなっているカワセミがここでは見られる。

最上川中流域のこの地区は河川敷が比較的幅広く，又支流合流点の川原の部分を含めて中洲がよく発達し，堤防の内外には畠地，果樹園が多く，ヨシ，アシやヤナギ，クルミ，ハンノキなどのある原野もあるため，水鳥以外の鳥類の繁殖地餌場，生息環境としても良く，多くの種類が見られる。

ワシタカ類が多く確認されているのも特徴で，トビ，オオタカ，ノスリ，サシバ，チュウヒ，ハヤブサ，コチョウゲンボウ，チョウゲンボウなどである。

以前は谷地橋の橋ゲタ下にチョウゲンボウの繁殖が長い間見られたが最近では確認されていない。しかし，常時この附近には姿を見せているので近くに営巣場所を移したものと思われる。

以前よりカッコウは減少しているが，オオヨシキリ，コヨシキリ，モズなどに託卵しているのがまた多く見られる。

冬鳥であるマヒワ，ツグミ，ベニマシコ，シメ，カシラダカなどの小鳥類や秋冬の季節に山地から漂行してくるアオゲラ，アカゲラ，ヒガラ，コガラ，ヤマガラなどの漂鳥も多い。

オオモズ，コジュリン，オオセッカなどが県内で初確認されたのもこの地区である。

最上川中流域のこの地区全域で共通して繁殖していて，個体数の多い種類としてはオオヨシキリ，ヒバリ，カワラヒワ，ホオアカ，キジバト，モズ，キジ，イソシギ，コチドリ，カルガモなどが顕著である。

この地区で以前より確認された種類とこの度，調査して確認された種類を合計すると130数種にものぼり，県内全体の既知種の半分以上にも達するが，現在ほとんど見られない種類をのぞいた104種を報告することにした。

2　最上川中流における鳥類の生息地

(1)　長崎橋附近の鳥類

この地区は馬見ヶ崎川，立谷川を集めた須川が合流し寒河江川を合流するところであるが川原と中洲がよく発達した流域である。特に礫の川原が広く，コチドリ，イカルチドリ，イソシギなどが繁殖し，ヨシ，アシ原，ススキ，ヤナギなどの灌木林内にはオオヨシキリ，コヨシキリ，カワラヒワ，カルガモ，キジ，モズ，キジバトなどが繁殖している。

砂礫川原に生えたヨモギ，ハハコグサなどの中や，草地，牧草地にはヒバリ，ホオアカなどが生息しており，それぞれ絶好の繁殖地になっている。

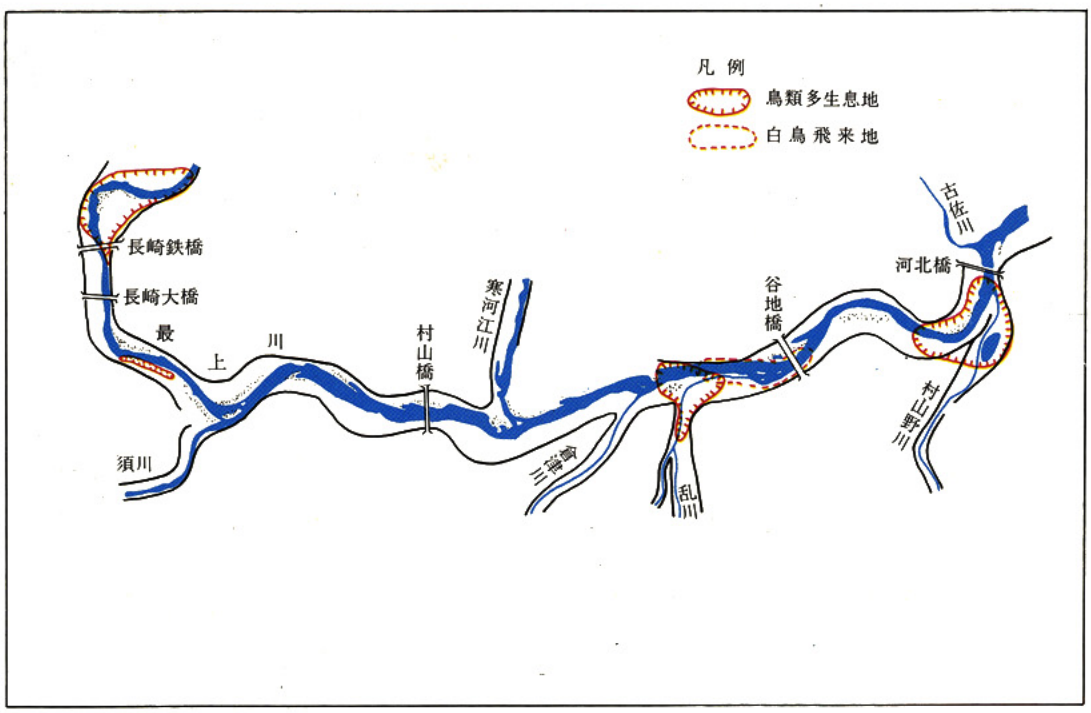
須川流域のヨシ原や比較的大きい立木のなかでもオオヨシキリ，カルガモ，キジ，モズ，キジバトなどのよい繁殖地になっている。

乱川河口附近，谷地橋下流附近に比較して鳥類確認種数は少ないが，ゴイサギ，アオサギや秋・冬の候には多くの種類のカモ類，山地から漂行してきたノスリ，アカゲラなども見ることができ，この地区で確認できた鳥類は52種であった。

▲群れ飛ぶ鳥たち（長崎橋下流）

▲多くの鳥たちが集まるクルミの林（長崎橋下流）

▲川辺に広がるヤナギの林には多くの鳥が集まって来る。（長崎鉄道橋付近）



(2) 乱川河口附近の鳥類

乱川は河口部の川幅は比較的狭く，上流部では例年流水が枯渇してしまう河川であるが，河口附近では伏流水が湧水として流出し，水量の割に水生昆虫やオイカワなどの魚類が多い。

又，川底が低く両岸が崖地になっており，その崖地を利用したカワセミの営巣地があるのがこの地区の特徴である。野川大堀地区でもカワセミは発見されているが巣穴は未確認である。

カワセミは以前全国的に広く分布していた種であるが，現在県内でも平野部で見ることはほとんどできなくなってしまった貴重な種類である。

乱川両岸には，ヤナギ，スギなどの木立が見られるためクロツグミが繁殖している。クロツグミは山地には見られるが，平地の繁殖地はどんどん減少しておりこれも貴重な繁殖地である。

河口附近には，イソシギ，コチドリ，イカルチドリ，ホオアカ，セグロセキレイ，オオヨシキリが多く繁殖している。

谷地橋下流附近に次いで種類の多い地区で，これより下流の地域と重複している。春・秋の候には旅鳥であるハマシギ，キアシシギ，タシギなどが姿を見せ，冬期にはハクチョウがこの地区でも観察できる。

▲平地では希少は存在となったカワセミの繁殖地（乱川合流点）

▲乱川合流点に広がる川原はカワセミたちの狩猟場である。

(3) 谷地橋下流附近の鳥類

河北橋の前後で河流は大きくS字状にカーブし，村山野川が合流するところであるが，この地区も中洲の発達しているところである。このことと野川河口の大堀地区を含めると確認できた種類数は他の地区に比して最高で，全調査区間の確認種すべてがこの地区で見られる。

全最上川流域でもこれほど多数生息できる地区はなく，狭い面積の一ヶ所でこれ程多くの鳥類を確認できる場所は県内どこにも見あたらない。

谷地橋附近にはヒルムシロなどの水草類が多く，毎年白鳥が飛来しているが，オオハクチョウ，コハクチョウの2種がいる。

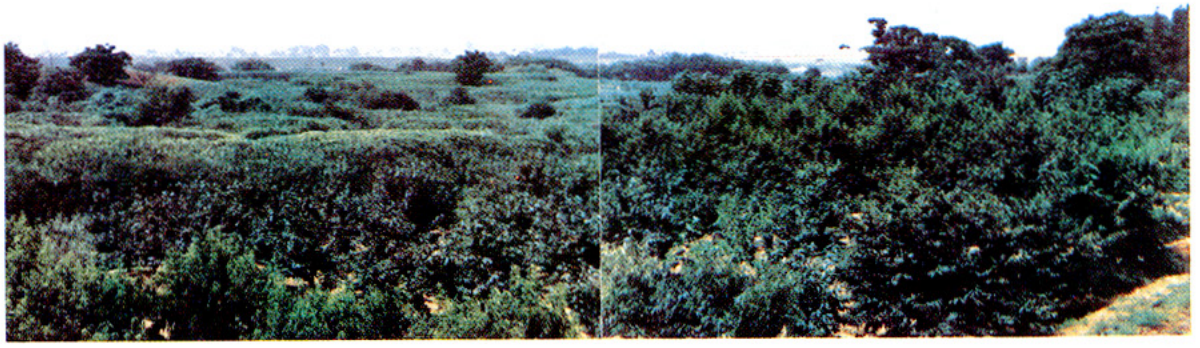
河北橋下流の中洲は規模が大きく，一部湿地状となりクマノイヌビェ，エゾノサヤヌカグサ，チョウジタデなどが密生しているため鳥類の繁殖地になっているほか，渡りの時や冬期にはケリ，シギ類，カモ類の大群などが羽を休めているのが観察できる。

東根市を通り流れる村山野川の河口で重なりあう大堀は，最上川の河川改修により生じ，通称古最上と呼ばれている。

野川の水が渇れても，湧水地帯を流れる小見川などが常に流れ込み湿地となり，

◀谷地橋付近には毎年白鳥が飛来する。

鳥たちの楽園，村山野川合流点▶のヤナギ林



▲県内でも有数の野鳥の多生息地（村山野川合流点）

ヨシ，ヤナギ，アカシアなどが密生し水鳥類を始め多くの野鳥の繁殖地になっている。又渡り鳥の中継地にもなっている。

筆者の一人である真木が過去10年間，調査，確認した種類は 129 種で学術的にも貴重な鳥類が数多く含まれている。

県内では当地区のみ繁殖地とするササゴイは年々減少している状態である。ゴイサギのコロニーも確認されておりその数は 150 羽を越えている。

ゴイサギは昭和45年頃まで200羽～300羽位いの集団繁殖地であったが，河川敷内のヤナギ林が伐採されたため関山の山地のカラマツ林に移動したといわれていた。しかし，再びヤナギ林が一部回復すると昭和50年から又大堀で繁殖するようになり関山地区では見られなくなっている。

ほかに，ホウアカ，コヨシキリ，クロツグミ，セッカ，オオヨシゴイ，ヨシゴイ，イソシギ，カイツブリ，バン，カルガモなどが繁殖しており，渡りの時期にはコサギ，ノビタキ，タゲリ，オオジョリン，キンクロハジロ，ホウジロガモ，ヨシガモ，ハシビロガモ，オシドリなどが確認されている。

珍鳥としては，昭和51年 1 月に迷鳥であるオオモズ，50年 5 月にアマサギ，50年 4 月にコジュリン，48年 5 月にオオセッカ，50年11月ミコアイサ，ツルシギ，などが姿を見せている。

以上のようにこの地は貴重な野鳥の生息地ではあるが，また鳥獣保護区に指定されてないのは遺憾なことであり，是非この地区を鳥獣保護区として守るべきである。

3　最上川中流の特記すべき鳥類

前記と重複するところがあるが，当流域内において確認された数多くの鳥類のうち，特に注目すべき種類が含まれている。

乱川河口附近と大堀ではクロツグミとカワセミが繁殖し，谷地橋附近ではオオハクチョウやコハクチョウが毎年飛来しており，昭和50年２月には，九州と山口県に越冬のために日本にやってくるナベヅル４羽が確認されている。県内では迷鳥の部類に入る種類である。

河北橋下流にはセッカやホウアカ，コアジサシなどが繁殖し，ダイサギ，コサギ，タゲリ，ケリ，ユリカモメ，オシドリ，アオサギ，ミコアイサなどが飛来する。

大堀地区（野川河口附近）ではゴイサギ，ササゴイ，ヨシゴイ，オオヨシゴイとサギ類の貴重な繁殖地となっているほか，オオモズ，アマサギ，ハシビロガモ，キンクロハジロ，ホウジロカモ，ヤマセミ，コジュリン，コチョウゲンボウ，オオタカ，ハヤブサ，チュウヒなど数少ない種類が確認されている。

(1)　ゴイサギ

サギの仲間では最も多い種類で中形の大きさである。

色彩は，背は緑色光沢のある黒色，頸，翼，腰，尾は灰色，額，顔，体下面は白色で繁殖期には後頭に２・３本の白色の長い飾羽が生える。嘴は黒く脚は暗黄色又は肉色である。若い鳥は背面褐色でこれに黄褐色の縦斑があり，このため幼鳥は俗にホシゴイとも呼ばれている。

ゴイサギは欧亜，アフリカ，日本などに広く分布しているが北海道には少ないという。漂鳥で冬になると南に渡るが，県内には一部残って越冬するものがあり留鳥にもなっている。

巣はコロニーを作り営み，県内では羽黒山，尾花沢市，白鷹町などで知られているが，ここの大堀地区のコロニーは河川敷内のヤナギ林が大きくなるにつれて数が多くなると考えられる。以前に比べて数が減少している現在，貴重な繁殖地になっている。

夜間にクワー，クワーと鳴きながら広範囲に活動し水辺で魚類，カエル，貝類を捕食している。

(2)　ササゴイ

形，色彩はゴイサギに似ているが，はるかに小形で数が少なく，日本では中部地方以西に多い鳥なので，山形県内では貴重な種類である。

新旧両大陸の温熱帯地方に広く分布しているが多数の亜種に分けられる。わが

国で見る亜種はアジアの東部沿岸地方に繁殖しているもので沖縄，フィリピンなどで越冬する夏鳥である。

主に夜間活動し，樹上に小枝を使って巣を作るなど繁殖その他の習性はゴイサギに似ている。県内で繁殖が確認されているのは，ここの大堀地区だけである。

(3) アマサギ

コサギぐらいの大きさで冬羽は全身白色になるのでコサギと混同しやすいが，夏羽では頭，頸部と背には美しい橙朱色の飾羽がでる。そのためショウジョウサギの別名がある。

本種は南欧，アフリカ，アジア中南部地に広く分布するが，アジアのものは亜種で中国，インド，日本に分布する。日本では本州中部以南に夏鳥として渡来するとされているため県内では未確認の種類であったが，昭和50年になってここ大堀地区と庄内海岸で初確認された。

他のシラサギ類の群に混じって繁殖しているが，近年著しく減少している種である。魚類よりも昆虫類や小動物を主食としている。

(4) ヨシゴイ

サギ類中最も小さい種類で，全体褐色に見える，夏鳥である。

群を作らず沼，川岸のヨシ，アシの茂みや竹藪などに住み，カエル，小魚などを食している。

茂みから出ることはあまりなく，出てもすぐに叢中に隠れてしまうのであまり姿を見ることはない。

1～2m位の低い所にヨシの茎などを積み重ねて巣とするが，人が近づくと巣に座っている親鳥は頸を伸ばして正面を向く習性がある。のどにある褐色の縦の縞が周囲のヨシの色にとけ込んで，見事なカモフラージュになるという。

山形県内ではもともと少ない種であるのに生息環境がますますせばめられているので，この地の繁殖地は貴重な存在である。

(5) オオヨシゴイ

ヨシゴイに似るが，体が少し大きく色が濃く美しい。雄は背が濃い栗色であるが，雌は背に白色の斑点がある。夏鳥として渡って来て，ヨシゴイより数は少ないというが，山形県内ではヨシゴイよりむしろ多いように思われる。それにしても数は少ない種類で，全国的にも近年急激に減少しているという。

シベリアの東南部から朝鮮，中国北部，北海道，本州で繁殖し，冬には四国，九州，沖縄，中国南部，フィリピンなどに渡る。

巣は地上に作られることが多い。

(6) ダイサギ

シラサギ中最大の種類であるが，ごく稀にしか見られない珍らしい種類である。羽色は全身雪色で生殖時には背に多数の蓑羽が生える。嘴の色は季節によって色が変り，冬季は橙黄色，生殖時には基部を除き黒色となる。

本種は分布の広い鳥で全世界の各地で見られるが，日本にやってくる亜種はヨーロッパの西部からアジアの東南部にわたり分布する種類である。

わが国では冬鳥で北海道と本州で見られるが，特に近年数が少なくなってきている。県内では庄内地方でよく見られているが，内陸部でも最近，ここ大堀地区と山形市内で確認されている。

(7) コ サ ギ

シラサギ類中最も小さく，数も多い種類で日本には一年中生息する留鳥であるが，山形県内ではほとんど見られない種類である。

他のシラサギと同様全身真白の羽でおおわれていて，生殖時期のものは頭部から２～３本の長い飾羽と，背から尾端に向って美しい蓑羽が出る。

嘴と脚は黒色であるが，趾の部分は緑黄色となっている。

南欧，中南アジア，オーストラリアなどに分布するが日本では全国に生息するとされているが，チュウサギと同様山形県のような雪国には少ないようである。

(8) ア オ サ ギ

サギ類中最大の種類で，色彩は頭部が白く，頭上，後頭とここからでる長い飾羽は青色をおびた黒色。背面は灰色で下面は白色であるが，風切羽や胸側・腹側などに太い黒線がまじる。嘴と脚は黄色。

欧亜大陸の大部分と比阿など広く分布するが，日本の生息する亜種は東部シベリア，中国，朝鮮，日本などで繁殖しているものである。

多くは留鳥であるが一部南方に渡り，県内のものは冬になると姿を見せなくなり夏鳥が漂鳥である。

昔はゴイサギなどと共に山形市内にも繁殖が見られたというが，現在は少なくなり酒田市，羽黒山，尾花沢市名木沢，村山市最上川碁点地区などで少数が繁殖しているのが知られているだけになった。ここ最上川中流地区には毎年秋期に姿を見せている。

(9) ナ ベ ヅ ル

タンチョウのように体の大きいツルの仲間で，色彩は体の大部分は灰黒色で頭

と頸は白色，額と眼先は黒く，頭頂は皮膚裸出していて赤色である。

東部シベリア，中国北部，朝鮮，日本などに分布する。昔日本には多数渡来（特に西日本）したというが，現在では鹿児島県出水地方，山口県熊毛町などに毎年渡来するのが知られているにすぎない。

県内に姿を見せたなどということは迷鳥の部類で珍らしいことである。4羽ということは一家族のグループであったと思われる。

(10) イソシギ

上面灰褐色，下面白で飛ぶと白色の翼帯が目立つ小形のシギである。全国の河や河畔，磯辺などにかなりの数が春，秋の渡りの候にやってくる旅鳥になっている。しかし本州中部以北では川原や湖のそばなどで繁殖するものがあり，県内でも最上川中流域で多数繁殖しているのは，河川改修などで川原がどんどんせばめられている現在，貴重な繁殖地であるといえる。冬季は南に渡り，巣は水辺の草原・川原などの凹地に草葉を重ねて作る。

(11) カワセミ

ヒスイの別名がある。羽色は鮮かで美しい小形の種類で，留鳥である。

緩流，池沼などに住み小魚を獲物にしている。以前は全国の各地に多数生息していたが，現在は水質汚染，魚類の減少，生息環境の悪化などに伴ない急激に減少して貴重な種類になっている。年を追って都会，平地，山林と後退していって，

今では湧水地帯や養魚地などをのぞいてはめったに見ることができなくなっている。そのため環境悪化の度合いの示標種にもなっている。

巣は川土手，畑，石垣などに深い横穴を堀って造り，その奥に卵を産む。

色彩は暗緑色，青色，栗色，白色などが複雑に使われていて，光線の角度で色が変る。

日本に住む亜種は東南アジアにすむ種類と同じである。

(12) オ オ モ ズ

大きなモズの種類であるが，わが国では北海道と本州のあちこちで稀に見られるだけの珍らしい，数少ない種類である。

羽色は背面灰色，下面は白色で，眼先と翼は黒いが，翼の中央に一個の白斑がある。全体に白い鳥のように見え黒色の部分が目立つ。

日本で見られる亜種は樺太島（サハリン）の特産のもので，習性は一般モズ類と同じであるが，本種は大形なので小鳥類を多く捕食するという。

県内で確認され，記録されたのは大堀地区が初めてである。冬鳥。

(13) セ ッ カ

ウグイスに似た美しい小形の種類で，羽色は背面は地色黒褐色，各羽に淡黄色の緑がある。体の下面は黄白色。尾羽はわりに長く，外側のものほど著しく短いので広げると扇形になる。

世界各地に多数の亜種が生息するが，日本のものは日本特有の種類である。全国の草原，アシ原，麦畑などに生息するが，夏は高原の草地にもすむという。しかし山形県内では数が少なく，繁殖地はいくらも知られていない。

巣は禾本科植物の茎をクモの糸でつづり，それに枯草，根，穂などをあしらった長楕円形の精巧なものである。夏鳥。

(14) コジュリン

スズメぐらいの小形の種類で，雄の頭部が黒いのでナベカブリともよばれるが，冬には黒い部分にも黄白色がまじり黒くなくなる。雌はホオジロの雌によく似ているが，それよりも赤味が少ない。

わが国に生息する亜種は日本特有のもので，北海道と本州，九州に生息しているが数は少なく珍らしい種類である。主に夏季には高原に，冬季には低地の草原などに生息する。

県内では今まで繁殖地の確認はなく，旅鳥か漂鳥とされていた。酒田最上川河口で繁殖しているらしいものが発見されているが確認はされていない。大堀地区は貴重な渡来地である。

巣は地上に作られ，草の実子，昆虫類，クモ類などを食する。